読響

ごあいさつ

55周年を迎えて

常任指揮者

カンブルランからのメッセージ

2017年度、新しいシーズンが幕開けします。読売日本交響楽団は創立55周年を迎え、私が常任指揮者に就任してから、早いもので8年目を迎えることになります。

私たちは、昨シーズンにはベートーヴェンやマーラー、ブルックナーはもとよりデュティユーやメシアンなど現代音楽にも挑み、大きな成果を上げることができたと自負しています。今シーズンもさらなる前進を続けるべく、充実したプログラムをお届けします。中でも、11月のメシアン唯一の歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉（演奏会形式）は、私と読響にとって、非常に大きなチャレンジです。演奏時間だけで4時間以上もかかる巨大な作品で、全曲の演奏は日本で初めてになります。人間、動物、自然など全ての生命への愛が、豊かな色彩感で表された素晴らしい音楽は、今に生きる皆様の心にも深く響くことでしょう。

その他にも、ハイドン、ベートーヴェン、ブルックナー、マーラー、バルトーク、ヴィトマンら作曲家の多様なスタイルの曲を演奏します。

会場で皆様と音楽を共有できることを、毎回心待ちにしています。今シーズンも私たちの音楽を、耳と目と心を開いて、どうぞお楽しみください！

4.8［土］	第196回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Saturday Matinée Series, No. 196 Saturday, 8th April, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
4.9［日］	第196回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Sunday Matinée Series, No. 196 Sunday, 9th April, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）
Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING P.7

コンサートマスター／荻原尚子 Concertmaster NAOKO OGIHARA

ハイドン **交響曲 第103番** 変ホ長調〈太鼓連打〉［約27分］ P.11
HAYDN / Symphony No. 103 in E flat major "Drumroll"

Ⅰ. Adagio – Allegro con spirito
Ⅱ. Andante più tosto allegretto
Ⅲ. Menuet
Ⅳ. Finale : Allegro con spirito

［休憩　Intermission］

マーラー **交響曲 第1番** ニ長調〈巨人〉［約53分］ P.12
MAHLER / Symphony No. 1 in D major "Titan"

Ⅰ. Langsam. Schleppend. – Immer sehr gemächlich
Ⅱ. Kräftig bewegt, doch nicht zu schnell
Ⅲ. Feierlich und gemessen, ohne zu schleppen
Ⅳ. Stürmisch bewegt

［主催］読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
［事業提携］東京芸術劇場

4.15［土］	第567回 定期演奏会 東京芸術劇場コンサートホール／18時開演 Subscription Concert, No. 567 Saturday, 15th April, 18:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）
Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING P.7

ユディット／イリス・フェルミリオン（メゾ・ソプラノ）
Judith IRIS VERMILLION P.9

青ひげ／バリント・ザボ（バス） Bluebeard BÁLINT SZABÓ P.9

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

メシアン **忘れられた捧げもの**［約11分］ P.14
MESSIAEN / Les offrandes oubliées

ドビュッシー **〈聖セバスティアンの殉教〉交響的断章**［約25分］ P.15
DEBUSSY / Le martyre de Saint Sébastien, fragments symphoniques

2つのファンファーレ
Ⅰ. 百合の園
Ⅱ. 法悦の踊りと第1幕の終曲
Ⅲ. 受難
Ⅳ. 良き羊飼いキリスト

［休憩　Intermission］

バルトーク **歌劇〈青ひげ公の城〉** 作品11（演奏会形式／字幕付き）［約60分］ P.17
BARTÓK / The Bluebeard's Castle, op.11 (concert style)

［主催］読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
［協力］**アフラック**
［事業提携］東京芸術劇場

4.21［金］	第601回 名曲シリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／19時開演 Popular Series, No. 601 Friday, 21st April, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
4.23［日］	第95回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール／14時開演 Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 95 Sunday, 23rd April, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮／サッシャ・ゲッツェル Conductor SASCHA GOETZEL P. 8

ピアノ／ユリアンナ・アヴデーエワ Piano YULIANNA AVDEEVA P.10

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ウェーバー **歌劇〈魔弾の射手〉序曲**［約10分］ P.19
WEBER / "Der Freischütz" Overture

グリーグ **ピアノ協奏曲** イ短調 作品16［約30分］ P.20
GRIEG / Piano Concerto in A minor, op.16
Ⅰ. Allegro molto moderato
Ⅱ. Adagio – Ⅲ. Allegro moderato molto e marcato

［休憩　Intermission］

ドヴォルザーク **交響曲 第7番** ニ短調 作品70［約35分］ P.21
DVOŘÁK / Symphony No.7 in D minor, op.70
Ⅰ. Allegro maestoso
Ⅱ. Poco adagio
Ⅲ. Scherzo : Vivace
Ⅳ. Finale : Allegro

［主催］読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
［事業提携］東京芸術劇場（4/21）
［協力］横浜みなとみらいホール（4/23）

シルヴァン・カンブルラン

（常任指揮者）
Sylvain Cambreling

マエストロが挑む 20世紀オペラの傑作

近現代作品に一家言あるマエストロが、20世紀オペラの傑作、バルトークの〈青ひげ公の城〉に挑む。同時に取り上げるメシアン、ドビュッシーとの対比も楽しみだ。もう一つのプログラムでも、二つの交響曲、マーラーの〈巨人〉とハイドンの〈太鼓連打〉で鮮やかなコントラストを聴かせる。

1948年フランス・アミアン生まれ。これまでにブリュッセルのベルギー王立モネ歌劇場の音楽監督、フランクフルト歌劇場の音楽総監督、バーデンバーデン＆フライブルクSWR（南西ドイツ放送）響の首席指揮者を歴任し、現在はシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督とクラングフォーラム・ウィーンの首席客演指揮者を兼任する。また、巨匠セルジュ・チェリビダッケの後任として、ドイツ・マインツのヨハネス・グーテンベルク大学で指揮科の招聘（しょうへい）教授も務める。

客演指揮者としてはウィーン・フィル、ベルリン・フィルを始めとする欧米の一流楽団と共演しており、オペラ指揮者としてもザルツブルク音楽祭、メトロポリタン・オペラ、パリ・オペラ座などに数多く出演している。

録音にも積極的で、読響とは「幻想交響曲ほか」「ペトルーシュカほか」「第九」「春の祭典／中国の不思議な役人」「スコットランドほか」をリリースしている。

◇4月８日 土曜マチネーシリーズ
◇4月９日 日曜マチネーシリーズ
◇4月15日 定期演奏会

サッシャ・ゲッツェル

Sascha Goetzel

初見参　腕前に期待
ウィーン生まれの情熱家

©Özge Balkan

ウィーン・フィルのヴァイオリン奏者から指揮者に転向し、メータ、ムーティ、小澤征爾らの薫陶を受けて世界のひのき舞台へ。グリーグとドヴォルザークという押しも押されもせぬ名曲を相手に、どんな手腕を披露してくれるだろうか。

1970年生まれ。オーストリアのグラーツ音楽大学でヴァイオリンを修めた後、ニューヨークのジュリアード音楽院に留学し、小澤征爾の招きでタングルウッド音楽祭の見習い指揮者を経験した。その後、ウィーン・フィルのヴァイオリン奏者を務めるかたわら、シベリウス・アカデミーで指揮を学び、2001年にウィーン・フォルクスオーパーを振って指揮者デビューを果たした。

これまでにバーミンガム市響、ハノーファー・北ドイツ放送フィル、モスクワ響、フランス国立管、トロント響、N響、東京フィルなどに客演し、ブッフビンダー、レーピンらと共演した。また、オペラではウィーン国立歌劇場、サンクトペテルブルク・マリインスキー劇場、ロサンゼルス・オペラなどで活躍している。

フィンランドのクオピオ響首席指揮者、バーンスタインが創設したパシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）指揮者などを経て、現在、トルコのボルサン・イスタンブール・フィル芸術監督を務める。読響には初登場。

◇4月21日 名曲シリーズ
◇4月23日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

©Robert Frankl

ユディット イリス・フェルミリオン

Judith Iris Vermillion

ドイツ・ビーレフェルト生まれ。デトモルト音楽大学でフルートを学んだ後、ハンブルク音楽演劇大学で声楽に転向、メゾ・ソプラノとしてキャリアをスタートさせた。1988年からベルリン・ドイツ・オペラなどで経験を積み、アーノンクール指揮による〈フィガロの結婚〉ケルビーノ役と〈コジ・ファン・トゥッテ〉ドラベッラ役で国際的に注目された。これまでにアバド、バレンボイム、シャイー、ヤーコプス、シノーポリ、ショルティといった世界的指揮者と共演し、ザルツブルク音楽祭をはじめ、欧州の主要な音楽祭、劇場に出演している。

◇4月15日 定期演奏会

青ひげ バリント・ザボ

Bluebeard Bálint Szabó

ハンガリーのトランシルヴァニア生まれ。ルーマニア・クルジュ＝ナポカのゲオルゲ・ディマ音楽アカデミーを卒業後、ニューヨークとイスラエル・テルアビブで声楽を修めた。1996年からブカレストのルーマニア国立歌劇場の専属歌手を務めるかたわら、ハンブルク国立歌劇場とフランクフルト歌劇場でも活躍。これまでにミラノ・スカラ座、パリ・オペラ座、バイエルン国立歌劇場などに招かれている。バルトーク〈青ひげ公の城〉は得意な演目の一つで、ロイヤル・コンセルトヘボウ管やハンガリー国立歌劇場などで絶賛を博している。

◇4月15日 定期演奏会

©Christine Schneider

ピアノ ユリアンナ・アヴデーエワ

Piano Yulianna Avdeeva

2010年のショパン国際ピアノコンクールで第1位に輝き、アルゲリッチ以来、45年ぶりの同コンクール女性優勝者として世界的脚光を浴びた。

モスクワ生まれ。グネーシン特別音楽学校、チューリヒ芸術大学で学んだ。これまでにギルバート、ブロムシュテット、ヤノフスキ、ブリュッヘンらの指揮でニューヨーク・フィル、チェコ・フィル、ベルリン放送響、18世紀オーケストラなどと共演。室内楽にも積極的に取り組んでいる。フランスMIRAREレーベルからショパンなどの録音が出ている。読響には初登場。

◇4月21日 名曲シリーズ
◇4月23日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

4.8［土］ 4.9［日］

道下京子（みちした きょうこ）・音楽評論家

ハイドン 交響曲 第103番 変ホ長調〈太鼓連打〉

作曲：1795年／初演：1795年3月2日、ロンドン／演奏時間：約27分

ヨーゼフ・ハイドン（1732〜1809）は、ローラウ（現在のオーストリア領）生まれ。1761年にハンガリーの貴族、エステルハージー家に雇われ、副楽長に就いた。66年には楽長に昇格し、長きにわたりそのポストを務めた。しかし、財政難のために1790年に年金を得て退職（96年に再雇用）。その後、ハイドンはヴァイオリニストで興行師のザロモンの招聘（しょうへい）に応じ、91〜92年と94〜95年に渡英。自作の交響曲を演奏し、好評を得た。

交響曲第103番は、2度目のイギリス訪問中に作曲され、初演ではハイドン自らが指揮台に立った。タイトルの〈太鼓連打〉は、第1楽章冒頭などのティンパニによる連打のインパクトに由来する。

第1楽章　アダージョ〜アレグロ・コン・スピーリト　変ホ長調。ティンパニのトレモロによる連打で、曲は始まる。ゆったりとした序奏を経て、8分の6拍子の揺れるようなビートに乗って、第1ヴァイオリンが活力あふれる第1主題を奏でてゆく。

第2楽章　アンダンテ・ピウ・トスト・アレグレット　ハ短調。二つのテーマによる変奏曲。まず、ハ短調の荘重なテーマが示されたのち、ハ長調によるテーマが示される。二つのテーマは、交互に変奏してゆく。

第3楽章　メヌエット　変ホ長調。堂々とした趣を湛（たた）えたメヌエット。メヌエット主部では、付点のリズムが凛（りん）とした表情を際立たせている。トリオでは、舞踊風の抑揚のある旋律が印象的だ。

第4楽章　フィナーレ：アレグロ・コン・スピーリト　変ホ長調。ホルンの動機に導かれて、第1ヴァイオリンによる第1主題が現われる。この主題に含まれた動機やリズムは、フィナーレの音楽を緻密（ちみつ）に形成している。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

マーラー

交響曲 第1番 ニ長調〈巨人〉

作曲：1884〜88年（第1稿）／初演：1889年11月20日、ブダペスト／演奏時間：約53分

グスタフ・マーラー（1860〜1911）は、ボヘミアのカリシュト村（現在のチェコ、イフラヴァ近郊）に生まれた。彼は1875年にウィーンに赴き、ウィーン楽友協会音楽院でピアノと作曲、そして指揮を学び、同音楽院のピアノ科の名教師エプシュタインに認められた。同じ時期に、ウィーン大学の哲学科に在籍。そこで学んだショーペンハウアーやニーチェらの思想は、マーラーの音楽創作に少なからず影響を及ぼした。また、ウィーン大学ではブルックナーの講義も受け、深い信頼関係を築く。

1879年に音楽院を卒業したマーラーは、各地の劇場で指揮をして広く知られるようになり、86年にはライプツィヒ市立歌劇場の副指揮者のポストを得た。そして88年、ブダペスト王立歌劇場で初めて正指揮者の職に就く。さらに、97年にウィーン宮廷歌劇場の総監督になるなど、30代後半にして指揮者として最高レヴェルの地位を築き上げた。

交響曲第1番はライプツィヒの歌劇場時代に書き上げられた。この作品は、最初は交響曲として構想されたものではなく、1889年11月20日にブダペストで初演された際には「二部分からなる交響詩」であり、5楽章構成だった。その後、93年にハンブルクで演奏された稿では〈巨人〉というタイトルが与えられ、各楽章にも副題がつけられた。そのタイトルは、ジャン・パウルの小説『巨人』に由来すると見られ、のちに各楽章の副題とともに削除された。96年のベルリンでの演奏に際して、2番目の楽章（“花の章”）が削除され、4楽章構成の交響曲として披露された。

交響曲第1番は、1883〜85年に作曲された歌曲集〈さすらう若人の歌〉と強い結びつきがある。マーラーは84年にこの交響曲の作曲を始めており、〈さすらう若人の歌〉と同じ生活環境のなかで創作の筆を進めたとみられる。〈さすらう若人の歌〉は、マーラーが楽長を務めていたカッセルの歌劇場のソプラノ歌手、ヨハンナ・リヒターへの恋心が創作の背景となっている。この歌曲集について、マーラーの手紙には「逆境に出会って世の中に出てゆき、一人さみしく放浪を続けるさすらう人を暗示するように」と記されている。結局彼女に失恋し、その精神的な痛手は交響曲第1番の第3楽章にも反映されている。また、友人でブルックナーの弟子ハンス・ロットの交響曲からの影響も指摘されている。

第1楽章　ゆっくりと、重々しく ニ短調。この楽章は、長い序奏をもつ。弦楽器による保続音（弦楽器はフラジオレット〔一種の特殊奏法〕で奏する）が鳴り響くなか、木管楽器が下行4度を奏でる。この4度の音型は、〈さすらう若人の歌〉の第1曲“彼女の婚礼の日は”でも用いられている。ニ長調に転じたのち、カッコウの囀（さえず）りのように鳴り響く4度の音型に導かれ、チェロが第1主題をのびやかに歌い上げてゆく。この旋律は、同歌曲集の第2曲“朝の野辺を歩けば”の主題が借用されている。音楽は徐々に盛り上がり、木管楽器が細やかな音符からなる第2主題をはつらつと表す。

第2楽章　力強い動きで、しかしあまり速すぎないで イ長調。この楽章でも、低弦楽器の奏でる反復するリズムに下行4度が用いられている。スケルツォ楽章で、オクターヴの跳躍音程に乗って、木管楽器が生気みなぎる主題を表す。ゲネラルパウゼ（全休止）ののち、ホルンの響きに導かれてトリオに入る。トリオはヘ長調で、ワルツのような楽想。

第3楽章　荘重に威厳をもって、緩慢になることなく ニ短調。まさに葬送行進曲のような楽章である。ティンパニが刻む下行4度の音型とともに、主旋律をコントラバスが陰鬱（いんうつ）に綴（つづ）る。この旋律は、フランスの民謡「フレール・ジャック」を短調で表したもので、さまざまな楽器によってカノンのように受け継がれてゆく。そのなかを、オーボエが足取り軽やかに新たな旋律を示す。

続く中間部はト長調、ヴァイオリンの奏でる旋律は、〈さすらう若人の歌〉の第4曲“彼女の青い目が”に基づいている。

第4楽章　嵐のように活発に ヘ短調。シンバルの一打が陰鬱な気分を一蹴し、ドラマティックなフィナーレの始まりを告げる。序奏における凄まじい強奏のなか、トランペットとトロンボーンが、来（きた）る第1主題の断片を示す。この楽章は自由なソナタ形式、あるいは3部形式と捉えることもできよう。主部に入ると同時に、第1主題が完全な姿で現れる。音楽は、荒々しい響きをともなって進んだのちに変ニ長調に入り、第1ヴァイオリンが息の長い第2主題部を魅惑的に歌わせてゆく。コーダはニ長調に転じ、楽譜にはホルンが立って演奏するように指示されている。

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（バスクラリネット、エスクラリネット持替）、エスクラリネット、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン7、トランペット5、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、銅鑼）、ハープ、バンダ（トランペット3）、弦五部

4.15［土］

柴辻純子（しばつじ じゅんこ）・音楽評論家

メシアン
忘れられた捧げもの

作曲：1930年／初演：1931年2月19日、パリ／演奏時間：約11分

常任指揮者カンブルランは、1月の定期演奏会ではオリヴィエ・メシアン（1908〜92）最晩年の管弦楽曲〈彼方の閃光〉（1987〜91）を取り上げた。オーケストラを自在に操り、透明度と輝度の高い音楽を作り、メシアンが到達した多彩な響きを聴かせてくれた。今月振るのは、その作品から半世紀以上前の〈忘れられた捧げもの〉。パリ国立高等音楽院卒業の年に書かれた。

メシアンは1919年にパリ国立高等音楽院に入学し、30年に5科目で1等賞を得て卒業した。同年、パリのトリニテ教会の首席オルガニストに就任し、本格的な創作活動に入る。本作もその時期の作品のひとつで、シャンゼリゼ劇場で初演され、彼にとって初めて公開で演奏された管弦楽曲となった。

メシアンは、敬虔（けいけん）なカトリック信者で、楽譜にはカトリックの教えに基づく詩句が掲げられている。そのなかで「あなたは私たちを愛してくださる、優しきイエスよ、そのことを私たちは忘れていた」という言葉が繰り返されるように、ここではイエスの憐（あわれ）みと、それを忘れてしまった人間の罪が作品のテーマとなっている。全体は、この詩句に従って、後にタイトルが与えられた「十字架」「原罪」「聖体の秘蹟（ひせき）」の三つの部分が切れ目なく演奏される。

交響的瞑想（めいそう）の副題が付されたこの作品は、静かに開始される。第1部（とても遅く。痛ましく、深い哀しみをもって）は弦楽器の息の長い甘美な旋律がゆるやかに流れ、中間部（速く。冷酷に、絶望的に、あえぐように）の力強いリズムの反復はストラヴィンスキーを思わせ、金管楽器は輝きを放つ。終結部（きわめて遅く。大いなる憐（あわ）れみと大いなる愛をもって）は弦楽器のみで、低音から広がる愛に満ちた音楽が最弱音で終結する。

楽器編成／フルート3、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル、大太鼓）、弦五部

ドビュッシー
〈聖セバスティアンの殉教〉交響的断章

作曲：1911年／初演：1911年5月22日パリ（劇音楽）、1914年1月4日プラハ（交響的断章）／演奏時間：約25分

本日後半で演奏されるバルトークの歌劇〈青ひげ公の城〉とクロード・ドビュッシー（1862〜1918）の5幕から成る劇付随音楽〈聖セバスティアンの殉教〉は、ともに1911年に作曲された。ドビュッシーのこの作品は、イタリアの詩人で劇作家のガブリエーレ・ダヌンツィオ（1863〜1938）の聖史劇のための音楽として書かれた。

ダヌンツィオは、耽美（たんび）的な小説で知られ、早くからフランス語にも翻訳されて、当時から高い人気を得ていた。私生活も波乱含みで、派手な恋愛関係や多額の負債もあり、それらから逃れるために1910年にパリにやってきた。ここで彼は、ロシア・バレエ団の女性舞踊家イダ・ルビンシテイン（ラヴェル〈ボレロ〉の初演で踊ったことでも有名）の舞踊に夢中になった。彼女に自分の舞台への出演を依頼し、初めてフランス語で、4000行近くにも及ぶ長編の詩を書いた。それが『聖セバスティアンの殉教』である。ダヌンツィオは、テキストが完成する前から、舞台装置と衣装をバクスト、振付をフォーキン、演出をブールに依頼し、音楽は最終的にドビュッシーに依頼することにした。

一方、ドビュッシーは、1910年11月25日付の彼からの手紙を、ウィーンへの演奏旅行中に受け取った。台本が未完成のうえ、翌年5月に初演予定と短期間で作曲しなければならなかったが、12月にパリのシャトレ座の支配人と契約を結んだ。すでにバレエ音楽〈カンマ〉（1911〜12）の仕事も決まり、多忙であったにもかかわらず、ダヌンツィオの申し出を受けたのは、当時ドビュッシーには借金があったためではないかと推測されている。年明けからこの聖史劇の仕事に専念したが、台本は仕上がらず、途中で4幕から5幕に変更になった。そのためオーケストレーションは、友人のアンドレ・カプレ（1878〜1925）の助けを借りて完成させた。

なんとか初演に間に合ったものの、その1週間前にパリの大司教が、この作品はキリスト教の聖なる殉教（じゅんきょう）者を汚すものだとして、カトリック教徒の観劇禁止令を出した。さらにローマ法王庁は、初演当日、ダヌンツィオの全作品を禁書に指定した。それでも予定通り、上演に5時間近く要する大作は初演された。しかし、複数のソリストや合唱も入るが、音楽は1時間程度のため、オラトリオともバレエとも言い難い作品に

観客は困惑した。6月1日までに10回公演を行ったものの、その後、この完全版で上演されることはなかった(1922年にパリ・オペラ座でルビンシテインの主導で再演された記録は残る)。

ドビュッシーは、それでもこの作品を諦めきれず、ダヌンツィオの承諾を得て、オペラ化することを模索する。台本作家ルイ・ラロアとともに亡くなる数か月前まで、その仕事に取り組んだが、オペラへの夢は果たせなかった。劇音楽としては、2009年にデュラン社から刊行されたドビュッシーの作品全集の当該巻(Ⅵ-4)によれば、第1幕3曲、第2幕3曲、第3幕7曲、第4幕3曲、第5幕2曲の音楽が確認されている。

この作品は、キリスト教信者ゆえに皇帝の怒りに触れ、殉教した聖セバスティアンの受難殉教を題材としている。各幕のあらすじは以下のとおり。第1幕「百合の園」で火刑にされようとするキリスト教徒の双子の兄弟を見て、射手のセバスティアンはキリスト教に目覚める。第2幕「魔法の部屋」は、ディオニュソスの犠牲になった娘や異教徒や疫病者が救いを求めてやってきて、マリアの歌声が魔法の部屋の扉を開く。第3幕「偽りの神々の会議」でセバスティアンは皇帝との問答を経て、キリスト受難の踊りを踊る。第4幕「傷ついた月桂樹」では、アポロの森で処刑されるセバスティアンの運命が暗示される。女たちが無数の矢を受けたセバスティアンの身体を抱えようとすると、そこから矢は消え去り、彼が縛り付けられていた月桂樹の木に刺さっていた。第5幕「天国」でセバスティアンの魂は天国に向かっていく。

〈交響的断章〉は、カプレによって編まれた4曲から成る組曲である。本日は加えて、第3幕のための2つのファンファーレも取り上げる。2つ目はわずか8小節の短いものである。

第1曲“百合の園”　第1幕の前奏曲で、木管楽器の平行短三和音の動機でゆるやかに始まり、2台のハープが静かに揺れ動く。**第2曲“法悦の踊りと第1幕の終曲”**　第1幕に基づく音楽は、弦楽器のピッツィカートの軽やかな踊りから神秘的で清らかな響きを経て、壮大なクライマックスへと向かう。**第3曲“受難”**　第3幕の音楽。ファゴットの苦しげな旋律から、ゆっくりと密やかに進められ、打楽器の一撃が突き刺さる。**第4曲“良き羊飼いキリスト”**　終幕の音楽。うごめく低音を背景にイングリッシュ・ホルンが美しい旋律を歌う。決然と輝かしい光を放ったのち、静かに終結する。

楽器編成／フルート4(ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(シンバル、大太鼓、銅鑼)、ハープ3、チェレスタ、弦五部

バルトーク

歌劇〈青ひげ公の城〉 作品11(演奏会形式／字幕付き)

作曲:1911年(1912年、18年改訂)／初演:1918年5月24日、ブダペスト／演奏時間:約60分

20世紀ハンガリーを代表する作曲家ベラ・バルトーク(1881〜1945)の唯一の歌劇〈青ひげ公の城〉は、友人のベラ・バラージュ(1884〜1949)がヨーロッパ各地で語り継がれてきた「青ひげ伝説」を題材にして書いた台本に作曲された。バルトークは、ブダペスト音楽院で学び、卒業後は創作活動とともにピアニストとしても活躍した。1906年からは1歳年下のコダーイとハンガリーの民謡収集のフィールドワークを開始。民謡研究を生涯にわたって続け、第一次世界大戦前後にはこれらの旋律を用いた編曲作品も数多く残している。さらにバルトークは、コダーイがパリから持ち帰った楽譜でドビュッシーの音楽を知り、そのなかにハンガリーの民謡と同じ5音音階が用いられていることに気づき、彼の作品からも大きな刺激を受けた。

〈青ひげ公の城〉の台本は、もともとコダーイのために書かれたものだったが、彼が辞退したためバルトークが作曲することになった。曲は1911年に完成したものの、ハンガリーの芸術委員会から「演奏不可能」と判断を下されてしまう。しかし、1917年にバレエ音楽〈かかし王子〉の初演が成功を収めるとそれが追い風となり、翌年、ブダペスト国立歌劇場で初演された。

青ひげ伝説は、バラージュ以外にもペローの寓話(ぐうわ)(1697年刊行)や、メーテルリンク台本によるデュカスの〈アリアーヌと青ひげ〉(1907年初演)など、様々なかたちで知られているが、バラージュの台本は、それらとは大きく異なる。青ひげ公の留守中に妻がこっそり扉を開けるのでも、最後に前妻たちの死体を見つける筋立てでもない。また、ト書きにはそれぞれの扉に色彩光が指定され、バルトークはそれも音楽に反映させている。

あらすじは以下のとおり。婚約者を捨て、家族の反対を押し切って嫁いだユディットは、青ひげ公に城内の七つの開かずの扉を開けるように懇願(こんがん)する。第1の扉は拷問(ごうもん)部屋、第2の扉は武器庫につながり、第3の扉を開けると部屋には数々の財宝が隠されていた。第4の扉は血染めの土の上に花園が広がり、第5の扉の向こうには青ひげの領地が見渡せ、第6の扉は涙の湖だった。そして、最後の扉を開けると青ひげ公の前妻たちが現れる。青ひげ公は、ユディットに豪華な衣装と王冠を身に着けさせ、彼女も他の女たちと

同様、奥の部屋に消えていく。

オペラは全1幕で、プロローグとして吟遊詩人が前口上を述べるが、本日の演奏では割愛される。合唱を持たず登場人物は二人だけで、ドビュッシーやラヴェルの影響を受けた色彩的な管弦楽法は、心理描写を際立たせる。

音楽は、低弦楽器がゆっくりと反復する5音音階による音型に導かれて始まり、青ひげ公は、美しい新妻ユディットを連れて城に到着する。うごめくような暗い音楽が広がり、ユディットが手さぐりで壁に触れると濡れた感触がする。ここで全曲を通じて現れる短2度の血の動機が入り、不気味さを与える。ユディットは、七つの扉に鍵がかけられているのを知り、「扉を開けて城を明るくしましょう」と言って青ひげ公に鍵を開けるように頼む。

第1の扉“拷問部屋”（バラージュは深紅の光を指定。以下同様）　ユディットの好奇心を表すかのように、扉を開けた瞬間、ヴァイオリンの高音域のトレモロに木管とシロフォンの素速いパッセージがちりばめられる。ここでも血の動機が不気味な様子を描く。

第2の扉“武器庫”（橙色の光）　トランペットの動機を背景に、二人が対話する。武器は血にまみれていた。

第3の扉“宝物庫”（金色の光）　青ひげ公は、続く三つの部屋の鍵を渡す。ユディットが全音階的な旋律をのびやかに歌い、チェレスタとハープが宝物の輝きを表現する。

第4の扉“秘密の花園”（青緑色の光）　ハープの華やかな上行音型で扉が開かれる。ホルンに導かれ、美しく妖（あや）しい花園の情景が描かれる。

第5の扉“広大な領地”（太陽の光）　オルガンを含む全楽器の強奏で扉が開く。ハ調の力強い響きが光り輝き、ここを頂点に再び暗い色彩へと向かう。音楽が全休止となって、ユディットが「あなたの国は美しく、大きい」と2度繰り返すのも印象的である。

第6の扉“涙の湖”（乳白色の光）　青ひげ公は、これ以上詮索（せんさく）しないように頼む。ハープを含む涙の動機が現れる。

第7の扉“青ひげ公の先妻たち”（銀色の光）　青ひげ公は、「第1の女を見つけたのは夜明け、第2の女は真昼、第3の女は夕暮れ」と語り出す。そして第4の女、ユディットは「真夜中に出会った」。反復される音楽が次第に大きな波のようにすべてを覆い尽くし、彼女はその重みに沈んでいく。青ひげ公の「永遠に夜よ、続け」という言葉で幕は下りる。

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3（エスクラリネット持替、バスクラリネット持替）、ファゴット4（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット4、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、小太鼓、銅鑼、シンバル、サスペンデッド・シンバル、シロフォン、トライアングル）、ハープ2、チェレスタ、オルガン、バンダ（トランペット4、トロンボーン4）、弦五部、メゾ・ソプラノ独唱、バス独唱

4.21［金］　4.23［日］

柴田克彦（しばた かつひこ）・音楽ライター

ウェーバー

歌劇〈魔弾の射手〉序曲

作曲：1817～21年（全曲）／初演：1821年6月18日、ベルリン／演奏時間：約10分

ドイツ初期ロマン派の作曲家カール・マリア・フォン・ウェーバー（1786～1826）の〈魔弾の射手〉は、彼の代表作にして、“ドイツ初の国民オペラ”と称される記念碑的な一作。ドレスデンの宮廷楽長に就任して間もない1817年頃から1821年5月までの長い期間をかけて作曲、同年6月ベルリン宮廷歌劇場で自身の指揮によって初演され、画期的な成功を収めた。

文才ある法律家だった知人ヨハン・フリードリヒ・キントの台本による全3幕の物語は、1650年頃のボヘミア（現在はチェコだが、当時はドイツの支配下にあった）の森に囲まれた農村が舞台。若い猟師マックスは、恋人アガーテと結婚するためには射撃大会での優勝が条件とされた。銃の腕が不調の彼は、悪魔に魂を売ったカスパールにそそのかされて狼谷に行き、必ず当たるという魔の弾丸を入手。大会でこれが露見し、彼は窮地に陥るも、最後はアガーテの純愛に救われる。ドイツの民話を源流とする題材と、ゲルマン人の民俗的風土である森を背景にもつ本作は、ドイツのロマン主義オペラの第一歩を刻み、ワーグナーへの道を開いた。

単独で演奏される機会が多いこの序曲は、オペラ全体の内容を凝縮した劇的な音楽。序奏付きの自由なソナタ形式で書かれ、クラリネットの活躍が際立っている。序奏はアダージョ。ここでは深い森が描写され、4本のホルンによる有名な旋律が奏される。狼谷の不気味な音楽からモルト・ヴィヴァーチェの主部に移り、マックスの絶望のアリアに基づく激しい第1主題、アガーテの歓喜の歌に基づく優しい第2主題を軸に進行。悪と善が対立・葛藤するかのように展開され、ひと呼吸置かれた後の堂々たるコーダで、愛の勝利が謳（うた）い上げられる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

グリーグ

ピアノ協奏曲 イ短調 作品16

作曲：1868年／初演：1869年4月3日、コペンハーゲン／演奏時間：約30分

ノルウェーの国民主義音楽を代表する作曲家エドヴァルド・グリーグ（1843〜1907）が残した唯一の協奏曲にして、シベリウスのヴァイオリン協奏曲と並ぶ、北欧の看板協奏曲。

グリーグは1867年にソプラノ歌手ニーナと結婚し、1868年には女児アレクサンドラが生まれた。同年、彼は妻子と共に妻の両親がいるデンマークのコペンハーゲンに行き、主に当地郊外の夏の家でこの協奏曲を作曲。翌69年4月の初演で熱狂的な喝采を浴びた。つまり本作は、25歳の若きグリーグが幸せの絶頂期に生み出した出世作である。しかし、愛娘は1年後に亡くなってしまう。

グリーグは、15歳の1858年からドイツのライプツィヒに留学して、メンデルスゾーンやシューマンなどドイツ・ロマン派の音楽を吸収し、18歳でピアニストとしてデビュー。その後、さらにデンマークで作曲家ヌッドロークから国民主義の影響を受けた。本作には、こうした経験がすべて生かされている。すなわち、ドイツで学んだ協奏曲の形式とロマンティックな音楽、祖国ノルウェーの民俗音楽、そして彼が得意としたピアノ音楽……これらの要素が合体した作品である。

曲は、短調を基調としながらも明るさが漂う。ソロ・パートには名人芸的な技巧が盛り込まれ、豊かなリリシズムと共存している。そして何よりノルウェーの厳しくも美しい自然を感じさせる点が、他のピアノ協奏曲にない魅力といえるだろう。

第1楽章　アレグロ・モルト・モデラート。ティンパニのロールの頂点でピアノが華麗に登場する出だしが、ユニークかつインパクト大。その後は二つの主題を中心に、甘美さ、軽快さ、力強さが混じり合いながら進行する。

第2楽章　アダージョ。北欧の澄んだ空気感を湛（たた）えた、変ニ長調の緩徐楽章。清らかで夢見るような音楽が展開され、途中で華やかな部分も出現。切れ目なく第3楽章へ移る。

第3楽章　アレグロ・モデラート・モルト・エ・マルカート。木管楽器が行進曲風の刻みを始める部分からが第3楽章。活気ある音楽が続き、フルートが奏するのどかな旋律が印象的な中間部を挟んで、壮大な盛り上がりをみせる。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

ドヴォルザーク

交響曲 第7番 ニ短調 作品70

作曲：1884〜85年／初演：1885年4月22日、ロンドン／演奏時間：約35分

チェコの国民主義音楽の巨匠アントニン・ドヴォルザーク（1841〜1904）が、円熟期の扉を開いた作品。彼は、1878年作の〈スラヴ舞曲〉第1集で名を上げ、1881年に初演された交響曲第6番で、国際的な名声を高めていった。そうした上昇期の1884年3月、ロンドンのフィルハーモニー協会の招きで、初めてイギリスを訪問。自作の〈スターバト・マーテル〉や交響曲第6番などを指揮し、圧倒的な支持を受けた。その結果、彼はフィルハーモニー協会の名誉会員に選ばれ、協会から新たな交響曲を依頼された。そこで生まれたのが、この第7番である。ちなみに彼は、生涯に9回もイギリスを訪れることになる。

本作は、1884年12月13日に着手され、翌85年3月17日に完成。同年4月ロンドンで自身の指揮により初演され、大成功を収めた。さらにビューロー、リヒター、ニキシュといった大指揮者が相次いで取り上げ、急速に広まっていった。

折しもドヴォルザークは、イギリス訪問直前の1883年12月、ウィーンでブラームスの交響曲第3番の初演を聴いて多大な感銘を受け、自分も負けないような交響曲を書きたいとの意欲に燃えていた。これと相まって本作は、第6番までの交響曲とは違った緊密な構成と強い表現力をもつ、劇的な作品となっている。彼の音楽に通底するボヘミア情趣も、普遍的な交響曲様式の中に絶妙なバランスで融合。絶対音楽としての完成度の高さにおいては、民俗色が濃い第8番や第9番を凌（しの）ぐ作品とも称賛されている。

第1楽章　アレグロ・マエストーソ。暗く不安げな第1主題と牧歌的な第2主題を軸に運ばれる、悲劇性を帯びた音楽。

第2楽章　ポーコ・アダージョ。クラリネットが出す平穏な主題に、ホルンが奏する優しい主題等が交わる、ヘ長調の緩徐楽章。

第3楽章　スケルツォ、ヴィヴァーチェ。独特のシンコペーション・リズムをもつボヘミアの舞曲フリアント風の主部に、若干テンポを落とした明るめの中間部が挟まれる。

第4楽章　フィナーレ、アレグロ。冒頭の悲劇的な主題を軸に展開される、情熱的なフィナーレ。民謡風の流麗な主題が気分を変える。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部